



獾のティータイム 子育て親爺奮戦記

さねとうあきら

さねとうあきら

1935年東京に生まれる。早稲田大学在学中より戯曲の執筆活動をはじめ。1972年『地べたっこさま』で日本児童文学者協会新人賞受賞、1979年『ジャンボッコの伝記』で小学館文学賞などを受賞。

主な作品 『さねとうあきら評論集Ⅰ・状況の中の児童文学』『同Ⅱ・子どもの原像』(明石書店)、『おおかみがわらうとき』(明石書店)、『地べたっこさま』(理論社)、『ジャンボッコの伝記』(小学館)、他多数。

獺のティータイム 子育て親爺奮戦記 NDC 376.1

1993年3月25日 発行

著 者 さねとうあきら

発行者 小 川 茂 男

発行所 株式会社 誠文堂新光社

〒164 東京都中野区弥生町1-13-7

電話 03-3373-7326(編集)

03-3373-7171(営業)

印刷 奥村印刷(株)

製 本 (株)若林製本所

©Akira Saneto 1993 Printed in Japan

検印省略

(本書掲載記事の無断転用を禁じます)

落丁・乱丁本は、お取り替えいたします

ISBN4-416-89313-2

のてぃーたいム

子育て親爺奮戦記



さねとうあきら

目次.....



ささやかなブローグとして

第1章

ぼく、スキップできない——14

戦争しか知らなかった子からのメッセージ——22

赤んぼに教わった育児法——29

塾ぬき子育て記——36

死は再生の門——43

親があっても子は育つ——51

第2章

大人の救いのなさ 子どもの救われなさ——62

スポ根の母——70

二ホン語の勉強をしたら——76

未来設計するのは だれ?——83

バードウォッチング——91

悪役有情——99

「子どもらしさ」への誤解——105

第3章

世紀末の風景——114

わが町の幼児殺し——121

動物との友情 ペットへの愛情——128

丁氏とその家族——136

ゲーム感覚の戦争——142

小さなものたちの昭和——148

太古、人類は地球の一員だった——156

リスト保母さんと絵本神話——163

狐たちの群像——170

なぜ、今「ちびくろ・さんぼ」なのか——178

ぼく、古風ですか——185

希望——191

第4章

あとがき

獺のティータイム

——ささやかなプロローグとして

新聞の広告に、でかでかと獺の写真が載っていました。

「あら、獣のなかには、あなたそっくりのが、いるのね」

妻が見付けて、感嘆の声を放ちました。ころころ太っていかにも鈍重そうな珍獣は、残念ながら最近とくに体重が増えたわたしの体軀を連想させるのに十分でした。

「おれが子どもの頃、動物園で見たことがある。戦争中だったから、ろくな獣もない時代でね、だだっ広い囲いのなかにたった一頭だけ、ぽつんといったのが印象的だったな」わたしの脳裏にひらめいたのは、少年の日の思い出でした。

それはたしか、マレー産の獺でした。その当時日本軍がシンガポールを越えて、破竹の快進撃とやらをしていたので、わたしは戦利品でも眺めるように興味深く観察しました。

獺は思い切り首を下げて、長めの鼻を地べたにこすり付けているところでした。すると中学生の次兄が、

「あきら、見ろよ……今、だれかの夢を食ったぞ！」

と、押し殺した声で叫んだので、すーっとほったの血の気が失せたのを覚えています。僕が夢を食べるという言い伝えは聞いていたのですが、その瞬間を目撃したかと思うと、突然、いいようなない恐怖がこみあげてきたのです――。

「まあ、童話みたいね。夢を食べる獣なんて、あなたの創作じゃないの？」

しかし、わたしよりわずかに年少の妻は、僕が夢を食べるという伝説を、まだ承知していないようでした。

「冗談じゃねえよ、古来、悪い夢を食べる動物とされてきた……って、ここにちゃんと書いてあるじゃないか！」

わたしは、広告の隅に小さな文字で印刷してある文章を指差しました。

「あ、そうか。最近世の中も悪くなって悪夢の連続だから、こんなにぶよぶよに太ってしまったわけね。今後この夢食い怪獣さん、どんどんどんどん太って、地球よりも大きくなりそうだけど、たしかにあなた好みの怪獣ね」

と、妻は笑い飛ばしてくれましたが、

「どうも受け止め方が、純真じゃねえんだよなあ。これも世の中が悪くなった証拠か」
わたしは古風な伝統主義者のように、形なしになった縁起ものの動物を惜しみました。

*

二十代の初めにある劇団に入ったばかりの頃、わたしのことを「摸」と呼んだ友だちがいました。生来の不器用が災いして、舞台の裏方をやらせても動作が鈍重に見えて、舞台監督から叱られてばかりのわたしに、

「さねとうは摸だからな、転換の時にも夢想してるんだ」

と、あまりうれしくないニックネームを付けてくれたのが、同期生のS君でした。

「それにしても、さねとうの夢想の波長は現実離れしていて、肉体労働の裏方には向かないらしいや、劇作家にでも転向したら……」

と、わたしの「人生の選択」に協力してくれたのも、同じS君でした。

ほんとうのことをいうと彼も劇作家志望で、その頃はわたしをしのご実力の持ち主でしたが、わたしの処女戯曲が上演されるのを待たずに、劇団を去っていきました。彼の実家は地方都市の小さな写真館だったのですが、お父さんが急逝したあと、ただ一人の男の子だったS君は、家業を継ぐために帰郷を余儀なくさせられたのです。

それから久しい年月、S君とは音信不通になってしまったのですが、最近になって電車のなかで、出し抜けに再会するチャンスを得ました。

「おい、さねとう……さねとうじゃないか！」

と、始発駅でわたしの隣の座席にすわったサラリーマン風の男から声をかけられたとき、瞬時にS君だと直感しました。頭に白髪を戴いていても、人の心を射抜くような視線は少年のように若々しく、三十年以上の歳月の隔たりを感じさせなかったのです。

「傍迷惑に太った摸みたいなやつがいると思ったら、やっぱりさねとうだったな。お前の本は何冊か読ませてもらったよ。頑固に夢想家を押し通して、あれだけの作品を書くようになったんだから、夢を飽食した摸みたいな体形が、お前には似つかわしい」

と、口の悪さだけは相変わらずでしたが、音信不通になりながらもわたしに注目してくれた、友情の深さに胸が熱くなり、

「いやあ、お前にそういわれると恐縮するよ。何十年もこの道まっしぐらにやってきた、と思われがちだが、どうしてどうして、そんなにカッコいいもんじゃないさ。こんなに割りの合わねえ仕事はまっぴらだと、なんべん逃亡を試みたかわからんのだが、いろんな事情があつてね、ついに逃亡させてもらえなかったというのが真相だよ」

わたしも正直な気持ちを吐露しました。

「子どもの芝居には、何かこう人を引き付ける磁力みたいなものがあるなあ。おれも劇団をやめた当初は、喪失感っていうのかな、世界が急に縮んじまって、途方もないせつこましい場所に放り出されたようで、完全に面食らったよ。子どものそばにいと、なぜ

か天地が広くなつて、時の流れまでゆつたりしてくるだろう。あいつが無性になつかしくなるときがある」

児童演劇から切り離された分だけ、S君が子どもの芝居にかけた思いには、新鮮でひた向きなものがあつた、わたしをたじろがせました。

「たしかに子どもつてやつは、背丈が低いせいか、大人よりも空が高く感じられるようだね。子どもサイズの世界は、大人には窮屈そうに見えるが、逆に大人サイズは子どもから見ると途方もなくでつかい。ガリバー的尺度で、同じものが伸びたり縮んだりする面白さを、われわれは味わえるわけだが……」

S君に触発された形で、わたしが日常としてきた子ども文化の世界が、いかに靈妙不可思議なものだったか、再確認させられる思いがしました。

「あの当時は、『子どもに夢を与える児童劇』を標榜していたけど、おれはあの頃からそれは大人の思い上りで、バケツで食わせるほどの夢を大人に与え続けたのは、実は子どもだったと思つていたよ。僕たちのティータイムのように、手当たり次第に夢をむさぼり平らげている子どもに、大人が夢を与えるなんておこがましいとね。彼らはファンタジーの天才なんだ」

とS君の指摘には、もはや返す言葉もなく、

「おれたちなんて獺のティータイムにお相伴した、場違いなゲストに過ぎなかったんだろうな。子どもたちのあの活気、あのひらめきに付き合わされることによって、辛うじておのれの感性をリフレッシュさせてきたんだ」

わたしはあくまでも、謙虚そのものでした。

*

わたしと子どもとの関わりは三十年以上に及び、決して短いものではなかったのですが、血気盛んな二十代には、動物園の獺舎の前で感じた戦慄がまだ生々しく、夢を「生き餌」として摂取できました。しかし、本来なら少年期特有のこのような感覚は、次第に薄れていつて当然でしたが、わたしの場合は子どもたちの文化の場に居続けることになったがために、常に子どもたちによって磨き上げられ、リフレッシュするチャンスを与えられ、まさに希有の幸運に恵まれたというべきでしょう。

今になって思うことですが、わたしが少年の日に、眼前で夢を平らげる獺に戦慄したのは、瞬時に現実を夢に転化させることができる、神秘の力を秘めたおのれの自画像と対面した驚きであり、恐怖であったように思います。S君が「ファンタジーの天才」と呼んだ子どもたちと、積年の付き合いを続けるうちに、子どもというものはいかなる現実も瞬時に夢に変化させてしまう、精巧でタフな「夢化装置」だということを発見しました。つま

り木の葉に含まれた葉緑素が、空気中の炭酸ガスを酸素に変えてしまうように、わたしが付き合い続けた「獺」たちも、汚濁した現実を濾過する浄化装置の役割を果たし続けているのです。

森の中を散策することにより、リフレッシュされた大気を胸いっぱい吸い込む「森林浴」が、現在、ちょっとしたトレンドになっていますが、だとすれば、われわれの尺度とは違った空間に住んで、秘めやかにテイクタイムを過ごしている獺の群れに加わり、クッキーの形をした夢のかけらなりとも口に入れるチャンスが得られたら、本当の意味でのエコロジーの理念がより具体化するはずです。

次なるトレンドとして出番待ちしているのは、子どもにとってはもとより、大人たちの活力素にもなる「心の森林浴」を、壮麗な出会いとして実体験させることでしょう。童話作家としてのわたしは、今後ともそのような作品にこだわり続けていくでしょうが、それというのも、今までに出会った獺たちへの、これがせめてもの恩返しなのです——。



第1章.....



ぼく、スキップできない

黒柳徹子さんの『窓ぎわのトットちゃん』を読んでいたときのことです。彼女が一年生で退学になってしまった公立小学校というのは、じつはぼくが入学した小学校でもあることを知り、あっと声をあげてしまいました。

それは、「トットちゃんが、退学になった、その前の学校では、放課後、学校の門を出てから、自分たちの校舎を振り返りながら、生徒たちは、こう歌った。

——赤松学校、ボロ学校 入ってみたら、いい学校」

とあったので、すぐにわかりました。この歌の歌詞はききおぼえがあり、大井町線の北千束駅のすぐ前にあった木造の古い校舎を思いだせるのに十分だったからです。

一九四一（昭和十六）年四月、「赤松国民学校」と改称されたばかりの「赤松学校」にぼくは入学しました。長兄が六年生で、次兄が五年生。ぼくたちの登校班の班長は長兄が

つとめ、うつすらひげをはやしたおとなのように体格のよい長兄にひきいられて、一月うまれでからだも特別に小さかったぼくは、おっかなびつくり学校に通うことになりましたが、トットちゃんが「不適合」をおこして退学になってしまいうような学校です。ぼくにとても「入って見たら、いい学校！」というわけにはとてもいきませんでした。

トットちゃんは、机のふたをあけたりしめたり、窓からチンドン屋に話しかけたり、軒端のツバメとお話をして退学になってしまったようですが、ぼくはというと、正反対の内向的な男の子で、借りてきた猫のように机にかじりついたまま動きませんでした。教室の一番前の席にすわらせられて、冬場などは目の前でじゃんじゃん石炭ストーブをたかれるので、顔がほてってほてってゆでだこのように真っ赤になりながらも、かたくなに席を立つとうとしない、そんな子どもでした。

ですから、体操や音楽は大ののが手で、特に音楽ときたら、通信簿に「不可」の烙印を押されてしまいました。ピリンポロンパラント、先生が伴奏してくれても、一声も発さなかったのです、こういう成績になったのだと思います。

ぼくは、トットちゃんのように退学こそさせられませんでしたでしたが、といって、あわてて自由なる学園にわが子を転校させてくれるようなやさしいママにも恵まれず、トットちゃんならほんのしばらくも辛抱できない学校に留まったまま、暗い一年生の時代をすごさな